小田原俳句協会報

理事会だより（4・13）

一、会長より、桜まつり俳句大会第二部中止につき改めて報告、会の運営協力への御礼と引き続き新年度への協力要請、新年度の人事への取り組み報告があった。

二、桜まつり俳句大会について、作品集は送付済み、郵便事情により選句依頼着までに相当日数を要したケースがあったので要注意との引継があった。

三、定期総会議案書案につき各部長より説明があり、審議・承認し総会に備えた。

四、その他　①今年度は名簿を発行し五月配布予定　②小田原市文化連盟が正式に解散になったことの報告　③藤田湘子記念俳句大会の実施時間等

第69回定期総会　4月21日出席17名委任状28名にて成立し、事業報告・計画、決算・予算、新人事につき審議・承認された。

理事会日程　5／12、6／9、7／14
いずれも木曜日6時より、於けやき

「俳句おだわら」10句抄（656号より）

加藤かほる　抄出

啓蟄や深海魚ちとざわついた　瀧本　敦子
高みより鴉の鳴くも淑気かな　秋山　昇
餅花や商店街の集会場　青木　孝子
受話器より自動音声春寒し　大島美恵子
雪掻きの厳しとありし友の文　岩本ひさみ
採寸や未知の伸び代草青む　石井千代子
寒鯉の眠るか池の面平ら　中山　妙子
雪の夜の翻車魚のような枕　大石　雄介
磯の水はしゃぎはじめて二月尽　小澤　園子
恋猫の虹彩闇をすり抜ける　杉山あけみ

田畑ヒロ子　抄出

啓蟄や片言の嬰（こ）は宇宙人　若村　京子
啓蟄や北より帰る子を待てり　菅野　英余
大初日朱を分けあひて空と海　吉田　康雄
受話器より自動音声春寒し　大島美恵子
茶の花の白き心地や佳き話　伊藤　道郎
春の山まだある九十の底力　井上　和子
寒明けて八十路ばかりの兄妹　岩楯惠津子
反抗期来たかきたかと冬木の芽　岡田　典代
磯の水はしゃぎはじめて二月尽　小澤　園子
すかんぽや自律神経失調症　瀬戸　正洋

第七十五回小田原桜まつり俳句大会

新型コロナウイルス下で第二部の俳句大会は昨年に引き続き中止となり、兼題「桜」「雲雀」の募集のみとなった。投句は百七十名、二百七十組・五百四十句。

兼題入賞作品（高点順）

神奈川県知事賞

桜舞ふ島を出る子と見送る子　日高　朝代

小田原市長賞

耕さぬ畑を雲雀に貸しておく　田畑ヒロ子

小田原市観光協会会長賞

暮れてなほ濠の息づき花明り　小澤　純子

小田原俳句協会会長賞

鐘楼の一打の余韻初桜　塩崎　琴

小田原俳句協会賞（以下20位まで）

花疲れ小鉤（はず）ひとつを外（はず）すにも　池田　忠山

制服の少し大きめ朝桜　小林　環

雲雀落ちしばし無音の空一枚　陌間みどり

雲雀高く空に抜け道あるやうな　寶子山京子

一瞬の光となりし揚雲雀　日高　朝代

揚雲雀声を残して点となる　秋山かつ子

夜桜やうしろに誰か立つ気配　田中　幸子

手放せし代々の畑雲雀鳴く　大佐田俊美

選者特選賞評

ぼくの青い山羊立っているさくらかな　大石　雄介

主観がこれほど強烈な句は滅多に出会うことは無かろう。通常の山羊といえば白なのに「青い」と強情を押し通している。青い山羊の動と恐らくはピンクの桜の静の対比と言えようが、それまで以上の映像が眼前する。

（佃　悦夫）

桜守胸のライカと老いにけり　畠　梅乃

植物好き、しかも桜好きで観察力の強い主人公と思いました。ドイツ製の高級小型カメラ。ライカを胸に、絶えず桜の成長を見廻り、病害虫の駆除や根廻りの管理に励んでおられるのであろう。充分な程感じ入りました。ライカと共に老いを楽しんで頂きたい。

（新井たか志）

三姉妹同じ制服桜咲く　守屋　まち

入学の制服と桜との取り合わせの句は枚挙に暇がないがこの句は別。三人とも順次同じ学校（それも中学か）に入学したのだろうが。文字どおり〈同じ制服〉、つまり二女、三女はお下がりだったのか。子沢山と貧困の時代を桜に重ね合せると頗る味わい深い。

（池田　忠山）

花筏かぜの機嫌で組み直す　中村　昌男
一畝はばばの受持揚雲雀　中山智津子
明日終る単身赴任夕ひばり　清水　呑舟
身の丈で生きて今日あり花仰ぐ　片山千江子
薄紙につつむ乳歯や花三分　豊田　幸枝
今日からは自転車通学揚雲雀　坂口　和代
ひばり鳴く止ったままの水車小屋　杉本　久子
鳴くたびに光こぼして揚雲雀　露木佳世子

選者特選賞

（小田原俳句協会名誉会長）佃　悦夫特選
ぼくの青い山羊立っているさくらかな　大石　雄介
（小田原俳句協会顧問）新井たか志特選
桜守胸のライカと老いにけり　畠　梅乃
（小田原俳句協会会長）池田忠山特選
三姉妹同じ制服桜咲く　守屋　まち
（草むら俳句会代表）佐々木重満特選
揚げ雲雀そこで東京みえるかい　横塚　昌平
（零俳句会代表）岡本史郎特選
花吹雪手帖に断酒と書いてある　木村　和彦
（鷹俳句会・小田原代表）村場十五特選
寸胴鍋ぐつぐつ花見客がやがや　長谷川きよ志

揚げ雲雀そこで東京見えるかい　横塚　昌平

掲句は昭和三十三年に三橋美智也のヒット曲「夕焼とんび」を踏まえたものであろう。当時の日本は高度成長期に入り、農村の若者は続々と都市へと就職していった。

本句は揚げ雲雀に作者の心情を技巧を弄せず素直に一句に仕立てており共感した。

（佐々木重満）

花吹雪手帖に断酒と書いてある　木村　和彦

真っ先に金子兜太の「酒止めようか」の句が浮かんだ。酒は良薬だが断酒は辛い。まして花吹雪である。禁酒ならば医師の指示だから素直に従うだろう。美酒の魅惑にひかれつつ断ち切る作者の心の強さを感じる。きっとその強さは人生に通じてもいる。

（岡本　史郎）

寸胴鍋ぐつぐつ花見客がやがや　長谷川きよ志

定型を崩した句だが、それがかえって臨場感を出している。「ぐつぐつ」「がやがや」のオノマトペと濁音のもたらす力強さ、そして寸胴鍋と花見客という対比が現下のコロナ禍から脱却して賑わいを取り戻したい、という願望を詠っているように思える。

（村場　十五）

令和３年度事業報告

〈主催及び主管事業〉

令和３年　＊第74回小田原桜まつり俳句大会：コロナウイルス感染防止のため、第一部作品募集のみ実施。兼題：「さくら」「春泥」投句者183名　投句数305組

＊秋の吟行会　10月10日　小田原フラワーガーデン　担当：総務部
当日嘱目3句　参加者26名　総互選　披講は各自

＊小田原文化の日俳句大会　11月3日 おだわら市民交流センター（UMECO）
小田原市民文化祭中止を受け当協会単独の俳句大会となった。
会場の制約により食事を各自済ませて12時より受付　整理費500円
第一部（兼題の部）兼題「文化の日」「鵙」投句者174名　投句数278組
第二部　（席題）秋季雑詠2句　参加者70名　総互選
なお、恒例の寿齢者表彰は昨年と本年分を合わせた対象者に記念品（クオカード）を贈呈（59名）

令和４年　＊立春句会　2月4日　小田原城址公園天守閣広場
小田原観光協会の意向を踏まえて短冊掛けのみ実施し句会は中止。

＊第58回小田原梅まつり俳句大会：コロナウイルス感染防止のため、第一部作品募集のみ実施。兼題：「梅」「寒晴」　投句者167名　投句数269組

<後援事業>

＊第65回滝まつり俳句大会（山北町俳句協会）
＊第46回笛まつり俳句大会（みなみ俳句協会）　感染防止のため中止。
＊第11回おおいゆめの里俳句大会（おほゐ俳句協会）
コロナウイルス感染防止のため、第一部作品募集のみ実施。

<その他の事業>

１．作品展示
＊小田原城址公園（春夏秋冬）　　担当　近藤久江

２．協会報特別配布　小田原市立図書館（中央、東口）生涯学習センターけやき・国府津学習館　小田原文学館　尊徳記念館　郷土文化館　おだわら市民交流センターUMECO　小田原市観光協会・小田原駅前観光案内所　川東タウンセンターマロニエ　小田原箱根商工会議所　神静民報社　神奈川新聞社平塚支局

〈その他〉佃悦夫前会長退任記念「俳句の岸辺」の刊行（8月）

令和４年度事業計画

<主催及び主管事業>

＊第75回小田原桜まつり俳句大会：コロナウイルス感染防止のため、第一部作品募集のみ実施。兼題：「桜または花」「雲雀」投句者170名 投句数270組

＊第3回藤田湘子記念小田原俳句大会　4月16日（小田原市・鷹俳句会と共催）

＊秋の吟行会　場所・日時未定　担当：広報部

＊令和4年度小田原秋季俳句大会：10月2日（日）おだわら市民交流センター（UMECO）

＊立春句会　令和5年2月4日　小田原城址公園天守閣

＊第59回小田原梅まつり俳句大会 令和5年2月5日 おだわら市民交流センター（UMECO）

<後援事業>

＊第46回笛まつり俳句大会（みなみ俳句協会）
＊第11回おおいゆめの里俳句大会（おほゐ俳句協会）
いずれも開催未定

令和５年度小田原俳句協会役員一覧

名誉会長　佃　　悦夫
顧　　問　新井たか志
　　大石　雄介
会　　長　池田　忠山（担当・全般、広報部、総務部）
副 会 長　長谷川きよ志（担当・事業部）　山田　照子（担当・会計部）
〈専門部理事〉〇印部長　• 次長（新設）
総務部　〇佐々木重満　• 岡本史郎　近藤久江　宮崎悦女　伊藤はる子
　　菅野英余
事業部　〇長谷川きよ志　木村幸枝・須田聡子（梅まつり事務局担当）
　　(兼) 加藤かほる（桜まつり事務局担当）
　　米山　翠（秋季大会事務局担当）
　　小野菊土・田中幸子・田畑ヒロ子（事務局アドバイザー）
　　岡田典代　守屋まち　若村京子　中根和子　芹澤常子　瀬戸りん
広報部　〇村場十五　• 齊藤　桂　田下昌人
会計部　〇寳子山京子　• 加藤かほる　陌間みどり
理　事　　青木勝子　青木たけを　秋山　昇　一ノ瀬茂代　伊藤道郎
　　大石和子　小澤純子　小澤園子　加藤まり子　神山つとむ
　　木村和彦　小島ノブヨシ　西賀久實　佐宗欣二　杉崎せつ
　　瀬戸正洋　瀬戸　悠　竹下由里子　田渕令子　出澤洋子　豊田幸枝
　　鳥海壮六　中根登美子　中村昌男　畠　梅乃　山﨑悦子
〈監査部〉川本育子　杉山あけみ

理事退任　石井千代子　田中惠一　澤口文子

新入会員　高杉掘三朗（こよろぎ）　高橋千代子（鷹）
　　武居裕美子・松下俊之（沈丁）　柳川紀枝（みなみ）　星一義（山北）
退会会員　井上良子　関根琉子　高橋正子　中野文子　尾﨑竹詩　中山妙子
　　石田和代　國島五月　鈴木久美子

俳句おだわら（4・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（3・31）　久江報

風光る定置網張る幾何模様　足立　和子
雛の間に雛のささめき一人の夜　川本　育子
瘤こぶの芽吹く力の息づかひ　高橋　小糸
龍天へ昇る草々なびきけり　山﨑　悦子
龍天に墨色醸す水墨画　近藤　久江

◆山北（3・24）　由里子報

健脚と言われる老の春帽子　和田恵美子
迷路めく院内地下路梅満開　尾崎　幸子
来月も逢う約束よ草青む　中山　妙子
鳥帰るやっぱりロシアしかない　尾崎　竹詩
背伸びしてかける甘茶や仏生会　石田加津子
ペン先の紙走る音春闌ける　竹下由里子

◆実のり（4・14）　たか志報

西海子の真っ直な道初桜　岩本ひさみ
春星やマトリョーシカの目に涙　杉本　久子
初桜開村の碑の鎮守さま　木村　幸枝
にはとりの頷き歩む彼岸寺　新井たか志

◆春野（3・20）　きよ志報

白蝶の光となりて空に消ゆ　秋山　昇
花衣たたむやふはり煙草の香　伊藤はる子
かあさんのファイトに負けし汐干狩　内田知江子
束で買ふ不祝儀袋冴返る　尾﨑　一夫
てのひらのベビーシューズが蝶になる　瀬戸　悠
閉校の十三人に春の風　二見　和江
荒れる春場所荒れ狂ふ国境　長谷川きよ志

◆香雨・梅ごち（3・20）　忠山報

踏青や少し甘めのたまご焼き　肥後ちさこ
うらうらに野を行く二両電車かな　関戸わよこ
彩りに春菊添へて鍋料理　青山　典子
鳴き声の聞こゑてきさう鶯餅　門松　鳳文
一服の玉露にそへて桜餅　吉田　百代
ますらをの曽我兄弟の碑に春日　吉田　康雄
踏青や足の喜ぶ靴を選（え）り　陌間みどり
打菓子の淡き色合ひ彼岸寒　小澤　純子
仇（あだ）討を今に伝へて彼岸西風（にし）　池田　忠山

◆こよろぎ（4・14）　つとむ報

川沿いのすみれ畑や風そよぐ　板谷　雅泉
夕暮のきらりきらりと上り鮎　植松テル子
虚子といふ宝石のあり春の雲　神山つとむ

◆沈丁（4・2）

春の海もうすぐ帰る父の船　中野　文子
自転車で行けさう沖まで春の海　若村　京子
鈍行の居眠り覚ます春の海　柳澤ミサ子
少女等の小石見せ合ふ春の海　田中　惠一
障子ごしの琴の調べよ春日和　河本　純子
一番の燕飛ぶや明日は晴　瀧本　敦子
「ひまわり」の彼の国憂ふ花吹雪　勝木　澄子
春の海延命処置は希望せず　菅野　英余
恥じらいは乙女のままに更紗木瓜　髙井　幸子
焦らずに生きる齢や春の海　片野　節子
春の海砂山石なげはしゃぐ声　峯尾ユキエ
世界中こうでありたや春の海　河本チヨ子
春の海泪あふれることもある　寶子山京子

◆青梅（4・13）

晩春や瓦大屋根光りをり　大塚　行人
球場にひびく歓声花の風　湯本とし子
ゆく春やうす紅色の遺稿集　神野美代子
制服の歩いて見える入学児　加藤まり子
たんぽぽの三坪の畑にみだれ咲く　久保寺トミ子
京訛ひと日茶店の水菜食ぶ　田渕　令子

寶子山報

はんなりの風の吉日雛納む　田中　幸子

◆みなみ（3・16）

東風の浜掛け声合わせ地引網　かほる報
のどけしや野にひろげたる手弁当　豊田　幸枝
手土産の赤い紐とき雛あられ　市川めぐみ
草萌や子の掃き清む慰霊塔　斎藤　静
春の野に植物図鑑持ち歩く　加藤　健治
東風吹くや空港に待つ金メダル　小瀬村信子
沈丁花朝五時半のよき目覚め　加藤れい子
落ちてより自己主張する紅椿　加藤　富江
　　加藤かほる

◆鷹（4・8）

春の昼柱時計のボンと鳴る　十五報
眼交（まなかひ）に嘴争ひの鳥も春　青木　孝子
啓蟄や琥珀に籠もるままの虫　西賀　久實
ケトル鳴る厨の朝や桃の花　佐宗　欣二
紫雲英田や五分遅れの電車来る　須田　晴美
クリックに弥撒の献金朧月　中田　笑子
蹄より春泥はぬる草競馬　百川　秀子
吊橋へ踏み出す一歩山桜　山﨑美知子
伐木に幹の軋みやはだれ雪　柏木　良花
鉄棒に逆さの空と菜の花と　庄司　下載
　　瀬戸　りん

繋ぎ足す灯の紐や暮の春　高橋久美子
早蕨や鳶ゆつたり輪をたもつ　中山智津子
卒業子家族の食器洗ひあぐ　齊藤　桂
紙干すや橋を行き来の谷戸住まひ　芹澤　常子
下着コーナー胸囲測るや夏近し　大木　敬子
番匠の藍の作務衣や鐘供養　大島美恵子
ひかり降る音かと思ふ高雲雀　田下　昌人
隣から借りて引き算チューリップ　中根　和子
鶏鳴に夢から覚めし春愁　加藤　幾代
散髪の鋏の音も春めける　高橋　正子
ひこばえや薬忘るる程に癒ゆ　守屋　まち
種蒔に鳥除けCD乱反射　米山　翠
春蟬や浅き眠りの夜勤明　來田　新子
芽柳や着信音のサザエさん　大沢　年子
ラーメンに胡椒たつぷり花曇　片野　秋子
尻濡れて気づく満ち潮桜貝　小林　環
七色の風が踊るや春ショール　下平　美子
船室に胎児のごとし春の暮　杉崎　せつ
帰宅時のバイクの音や春の闇　関根　琉子
波音の静かな朝や桜貝　鳥海　壮六
鳶翔(か)けて空の広ごる茶摘かな　古屋　德男
緩る緩ると湘子の浜や桜貝　村場　十五

◆おほゐ（4・13）

はにかむも細むる眼にも風光る　秀泰報
真白に破顔一笑沈丁花　高橋みどり
春ショール前髪すこし切ってみる　二上　光子
丹沢を背に吊り橋の風光る　小野　菊土
春光の中に踏み出す一歩かな　中村　昌男
川音の饒舌となり柳の芽　中根登美子
生き方は引き算もよし風光る　石井千代子
新計画埋め尽くされて風光る　廣田　悦子
バス待つや路傍に菫二つ三つ　加藤　春江
真っ新な靴よ瞳よ桜まじ　石井きよ子
風光る夢ふくらませ旅プラン　横塚　昌平
散り方がまばらでいいの花吹雪　瀬戸とみ子
富士映えて足柄平野花は葉に　風間　秀泰
母の袖離さず覗く入園児　香川　花子

◆たけのこ（4・13）

今年又廃墟の桜満開に　中津川晴江
桜散る路肩に花弁一直線　悦女報
山笑ふ幼犬の仕種夫の笑み　三木　泰子
御殿場の枝垂桜とあんみつ屋　久津間百合子
小宮　早苗
徳田　公子

春愁や木偶の息子と畑仕事　宮崎　悦女

◆零（4・21）

コロナ禍に戦禍の中に山笑う　史郎報

山笑う金管楽器ファンファーレ　青木たけを

ふるさとの庭の藤棚今はなく　伊藤　道郎

山笑うそのとき私は鳥になる　井上　良子

この空とこの風掴み山笑う　木村　和彦

戦禍の子らの無垢な瞳よ鼓草　佐藤　正子

真新し間伐切り株山笑う　中村　裕子

山笑うトンネル崩落リニア東名　野川木一路

◆草むら（4・19）

清明や背中に光るランドセル　岡本　史郎

何事もメモに始まり翁草　重満報

花菜畑深入り失神したらしく　石井　秀稀

鼓草　囃子手（はやして）だれを呼ぼうかな　井上　和子

◆無所属

母猫の子猫を諭すぐどぐどと　佃　悦夫

スマホなく遠くの嬰児雛あられ　佐々木重満

地球儀のまはる軽さよげんげ咲く　小林永以子

別腹が欲しがっている桜餅　蓑宮　わか

遺句帖に兄恋ふ夕べほととぎす　畠　梅乃

春の朝園丁水撒くひかり撒く　北村　文江

しだれ桜天より降りて清々し　木村美千代

春うららコマンドする人聞かぬ犬　一ノ瀬茂代

一滴のピエロの涙四月馬鹿　鈴木久美子

薄墨の地球の乱気さくらかも　出澤　洋子

葉桜のひかりまどろむ乳母車　山口　千代

花を浴び雨を浴び来る鳥の群れ　柴田　礼子

寂しいと言えぬプライド花の冷　山本　すみ

花の池ずれる筏の行く末は　岩楯惠津子

泣きたいと言うには触れず桜（はな）を言う　大佐田俊美

散る桜朝はやさしくものを見て　山田　照子

出発のミーティングらし帰る鳥　田畑ヒロ子

ブランコや巨大スピーカーから「叫び」　穂坂志げる

栗鼠ぴょんと飛び出る森の裁判所　青木　勝子

金魚らのちいさなお墓桜の実　瀬戸　正洋

すかんぽが大きく揺れて兄の気配　小島ノブヨシ

寒の戻りぬきさしならぬ事多し　須田　聡子

羊の毛刈って大気を素裸に　岡田　典代

その静寂裏紅一華と呼びにけり　小澤　園子

葱坊主にょきにょき解決策探る　大石　雄介

葉桜に命を託し平和こう　大石　和子

杉山あけみ

木村予史重

新作５句

大沢　年子

人影のなき魚市場燕来る
桜咲くレトロな駅に降りにけり
雉啼くや山の溜池枝伸びて
波音を遠くに聞きて春眠し
近道の田んぼ杉菜の生えにけり

大塚　行人

桜大樹筵しきつめ昼餉かな
花曇石佛たづねウォーキング
花の宴村の若衆地酒汲む
無住寺の参道ながし藪椿
菜の花や窓全開の小学校

加藤　春江

アスファルトを割って笑顔や桜草
失策を帳消しにする大花野
介護士の巧みな誘導風光る
放課後のような日日なり菫咲く
あるがまま今を肯定花匂う

木村美千代

兄の忌の浜辺歩めば月見草
蜘蛛の囲やゆらり雨粒光らせて
君子蘭古民家の庭埋め尽くし
柿若葉朝のジョギング人殖えて
言ひ過ぎを悔む別れや夏落葉

小早川のぞみ

春の山郷土史語る翁の背
竹パイプ手に取る水の温(ぬく)きかな
地震情報ニュース続く春夜のテレビ
沈丁花夜の帰宅の道しるべ
花の下犬をつないで自撮りかな

蓑宮　わか

遠足の保母の先頭後向き
遠足の列乱さずに一年生
遠足のじやれ合ふ後尾六年生
落城の姫の逃げ道著莪の花
陽を透かし人は緑に若楓

俳句おだわら鑑賞（令和４年１月号）

やわらかに飯噴く匂い花八つ手　　豊田　幸枝

一読して甘い匂いに包まれ、深い安らぎを覚えた。「やわらか」に噴くのは新米なればこそ。「花八つ手」との配合もいい。当たり前が消えた今、何げない日常がとても大切なものに思えてくる。ご飯で浮かぶのは沢村貞子の母君の「女の子は泣いちゃいけないよ。泣いてると、ご飯の仕度がおそくなるからさ」の言葉だ。今も時折、私に降ってくる。「いつまでぼやっとしてるのさ」の声と共に。

（竹下由里子）

小田原俳句協会　〒二五〇―〇〇一二　小田原市本町二―一三―二　池田　忠山方